様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 10 日現在

機関番号：23501
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2010
課題番号：21720070
研究課題名（和文）　日本近代文学の「家庭」表象において境界的存在（女中・妾・不良）が果たす機能の研究
研究課題名（英文）　Study on the representation of the marginal existence “Maid , Bad boy and Concubine” in modern Japanese literature

研究代表者
古川　裕佳（FURUKAWA　YUKA）
都留文科大学・文学部・准教授
研究者番号：80405076

研究成果の概要（和文）：
日本近代文学において、志賀直哉をはじめとする若い男性作家の作品に、家の女中と性的関係をもったことに苦悩する主人公像が描かれていることに注目し、罪意識と逸脱者意識の混交の果てに超越的な自己を見出そうとするような、共通した機構があることについて考察した。女中と関係してしまう「不良」のような、〈家庭〉イデオロギーからの逸脱者を描くことが、当時の文学にとって重要な課題であったことを明らかにし、家庭において家族と他人の中間的な存在であった「女中」の表象がどのように変容するのかを、当時の女中をめぐる言説および具体的な小説の表象に即して検討した。家庭にとっての異物であり、悪役とされる「妾」がお家騒動においてどのように機能したかを検討した。

研究成果の概要（英文）：

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成 21 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
平成 22 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：日本近代文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：日本近代文学、志賀直哉、女中、白樺、家庭、不良

１．研究開始当初の背景

本研究では、日本の近代文学、とくに小説作品において重要な主題となってきた「家庭」という場について、その境界的存在である女中・妾・不良に着目し、彼らが小説内で果たす役割を検討することによって、物語を生じさせる強力な磁場としての〈家庭〉の輪郭とその問題点を明らかにすることを試みた。近年の研究では家制度なるものが近代の所産であること、すなわち近代は前近代の家制度を捏造しつつ、近代的な家制度として家庭イデオロギーを規範化していったことが明らかになっている。であればむしろ家庭イデオロギーとの折衝こそが近代小説の課題だったのであり、だからこそ執拗に家庭が描かれたのである。

二十世紀初頭の文学においては、志賀直哉をはじめとする若い男性作家の作品に、家の女中と性的関係をもったことに苦悩する主人公像が描かれている。そのような家庭イデオロギーからの逸脱の表象の機構については十分に検討されてはいなかった。日本近代

文学においては、読者が、作品の主人公に対して「近代人」のモデルであることを求めたり、倫理的な期待を持つといった傾向があり、志賀直哉作品の主人公にもそういった読者の期待が投影されてきた。この作家を取りあげることで作品に作者の物語を重ねるという、日本近代文学の典型的な読み方の問題性についても検討できると考えたからである。
また加えて夏目漱石や佐藤春夫、太宰治などが、〈家庭〉とそこからの逸脱者を描いており、その作品における女中および妾の表象分析が有効であると考えられた。さらに谷崎潤一郎や里見弴の作品の不良像の表象分析によって近代の文学を総合的に捉えられると思われた。

以上の研究状況をふまえて、本研究は新たな知見を見出そうとしたのである。

２．研究の目的

日本の近代文学、とくに小説作品において重要な主題となってきた〈家庭〉という場について、その境界的存在である女中・妾・不良に着目し、彼らが小説内で果たす役割を検討することによって、物語を生じさせる強力な磁場としての〈家庭〉の輪郭とその問題点を明らかにすることを試みた。「女中」や「妾」といった存在は血縁家族ではないが〈家庭〉の一員として重要な役割を担っており、また「不良」は〈家庭〉の内側からそれを脅かす存在とされる。本研究ではこうした〈家庭〉の境界に位置する存在がどのように描かれてきたのかについて、性差の問題や家庭イデオロギーとの関連に注目して考察しようとした。他者として登場する境界的な存在の表象を分析することを通じて、日本近代文学の私小説的における作者＝男性主人公の偶像化のシステムを顕在化させる端緒を見出すことを目指した。

境界的存在という他者を鏡として、主人公像が構成されてゆくシステムを分析するに際しては、主人公を作者及び読者の欲望を媒介する装置として捉え、作品や主人公像が作者像に与える影響をも考察しようとこころみた。「家庭」の境界を担う「女中」「妾」「不良」を物語の糧として利用する機構を明らかにすることで、「家庭」イデオロギーと文学的表象の関連を明らかにしようとしたのである。
本研究は、日本の近代における逸脱者の存在が文学に与える影響を考察するものであり、作家研究・作品研究から文学史という場へと思考を広げていくことを通じて、文学研究だけでなく様々な研究領域と交流するものとなる。
私小説とされる作品において語られているのは、本当に「私」なのだろうか？私小説として読むから「私」が語られているように思えるのだが、それが必ずしも「私」を語っているとは限らない。たしかに作家主体にも「私」を語るという意識があったかもしれない。しかし、実現してしまった作品には「私」以外のものも描かれてしまっているはずだ。描かれてしまった「私」以外の部分を読みなおすことで志賀の中期作品の問題が見えてくるのではないか。たとえば中期作品の女性像に注目することで、従来は評価されていなかった作品の読みを更新することができるかもしれない。

上記の目的に沿った形で、明確な構図を見出せるように研究を進めてゆくことを心がけた。

３．研究の方法

日本近代文学の〈家庭〉表象について調査・研究を行った。とくに大正期の〈家庭〉イデオロギー的なものからの逸脱が主人公および主人公と関係する女性達にどのような意味を持っているのかを考察した。家庭イデオロギーを支える女性規範について、『婦人公論』など２０世紀前半の日本の婦人問題を幅広く捉えようとした雑誌の調査を行った。さらに文学作品における表象の機構について検討するため、文学文献を購入、複写して、重点的に分析した。

まず『白樺』についての調査研究と、また家庭の逸脱者というテーマについての調査研究を行い、彼らの作品に現れた逸脱の様相について考察した。志賀直哉や里見弴といったブルジョワ作家の作品では、主人公の逸脱の舞台は「家庭」であることを明らかにした。
また当時の「女中」をめぐる婦人雑誌などの言説について調査した。とくに『婦人公論』で主婦の家庭運営における女中の扱いについて繰り返し特集されている点に注目した。それをふまえて、小説の「女中」と婦人雑誌の言説との差異と相同性を検証した。女中という存在が小説空間に影響を与える機構を明らかにし、社会と文学表象との関係を考察することが可能になった。

このような逸脱が性的な問題における逸脱であるということをふまえ、性についての言説研究を行う研究会に参加し、討議・報告を行った。その上で雑誌『白樺』を調査し、男

性作家によって描かれた男性主人公の抱える問題と家庭イデオロギーがどのように関係していたかについて論文としてまとめた。

同時代の「女中」「不良」について、〈家庭〉イデオロギーとの関係を視野に入れながら言説分析を行い、また小説という特異な言語空間における表象のされ方について、主人公との関係から考察を行った点に、本研究の方法的な特徴があると言える。

４．研究成果

二十世紀初頭の文学において、家の女中と性的関係をもったことに苦悩する、若い男性作家の作品に共通した機構があることについて考察した。〈家庭〉イデオロギーからの逸脱者を描くことが、当時の文学にとって重要な課題であったことを明らかにし、「女中という装置―志賀直哉・里見弴・佐藤春夫」（『国文学論考』46号、2010年3月）にまとめ公表した。

さらに志賀直哉の問題を中心に、単著『志賀直哉の〈家庭〉　女中・不良・主婦』（森話社、2011年2月）をまとめた。分析にあたって、「女中」という存在が小説に与えた影響を考察することで、男性作家の自己像の分析に新しい切り口を見出した。そこでは「主婦」の空間であるべき〈家庭〉が境界的な存在によって脅かされているさまを検証し、志賀直哉だけではなく、谷崎潤一郎や佐藤春夫、里見弴の問題についても論じた。

第８章「女中という装置」においては、〈女中〉という存在が家族と家庭の境界に位置する魅力的なものであること、それが小説に描かれたとき、透明で安全であるべき家庭の中に階級的な差異を作り出し、物語を発動させる装置となることを明らかにした。第１章「家族という拘束、家庭という広がり」では、女中という境界的存在によって主婦や夫婦関係が脅かされるさまを見出そうとした。女中は血縁家族や核家族イメージでは捉えきれないものであり、家庭イデオロギーを攪乱することで小説世界にドラマをもたらす。そのような存在を発見したことによって、志賀の中期作品は家庭という場所を広がりを持って描く可能性を得たのである。

女中が家庭の一員として重要な役割を担っているのに対して、〈不良〉は家庭の内側からそれを脅かす存在である。第９章「「変態」としての「不良」」は、谷崎潤一郎「肉塊」や里見弴「多情仏心」の〈不良〉の表象分析とあわせて、近代社会が不良をどのように規定してきたかを教育言説などによって確認した。境界的な存在や逸脱者が管理の対象とされながら、文学的には魅力ある材料となってゆく過程を読み解いた。第10章「ラヴレター、取扱注意」ではラヴレターと不良の関係に注目し、「暗夜行路」の時任謙作が自らを不良と差異化しようとしながら、しかし最終的にラヴレターを書く男へと〈変態〉してゆく過程を見出した。これらの作品では〈不良〉を排除しようとする規範との抗争こそが、物語の原動力となっていたのである。

第１章と第５章「文壇小説としての「邦子」」で取りあげた「邦子」には、〈主婦〉という存在の問題が描かれている。家庭のほころびはしばしば境界的な存在によってもたらされる。〈女中〉〈不良〉という、家庭の一員でありながらいわばその境界に位置する存在は、家庭の中心たるべき〈主婦〉や主人公を脅かすのである。境界的な存在の役割を検討することによって、家庭イデオロギーの抑圧性が物語の背景となっていることを明らかにした。

このように『志賀直哉の〈家庭〉　女中・不良・主婦』では本研究の成果を志賀直哉の作品読解を中心にまとめている。自己や自我を語ってきたと見られていた志賀であるが、中期においては、自己から家庭へとテーマを進めている。とくに〈女中〉〈不良〉〈主婦〉の表象に注目して志賀作品の展開を捉えようと試みた。〈家庭〉の境界に位置する存在がどのように描かれてきたのかを性差の問題や家庭イデオロギーとの関連から考察したのである。家庭という場所で家族の拘束性を描き出す試みに、作家としての広がりを見出そうとした。

また歴史をさかのぼって、相馬事件と志賀直哉の関係についてとりあげ、併せて事件の首謀者とされた「妾」の存在についても検討した。研究成果をまとめた「志賀直哉「憶ひ出した事」――相馬事件の〈記憶〉と思い出されなかったこと」（『文科の継承と展開』都留文科大学国文学科編、勉誠出版、2011年3月）においては、民衆の敵となった経験を想起することの意義を検証しつつ、家からの逸脱者としての相馬藩主と志賀直哉の作品の「不良」的な主人公との関連性を、〈記憶〉の描かれ方に注目して論じた。

以上、本研究は当初の目的を果たしつつ、「狂人」とされることによって家庭の逸脱者となる者についての新たな問題系を見出すこ

とになった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
古川裕佳「女中という装置―志賀直哉・里見弴・佐藤春夫」（『国文学論考』、査読無し、46 号、2010 年 3 月、1-16 頁）

〔図書〕（計 2 件）
単著
古川裕佳『志賀直哉の〈家庭〉　女中・不良・主婦』（森話社、2011 年 2 月、321 頁）
共著
古川裕佳「志賀直哉「憶ひ出した事」――相馬事件の〈記憶〉と思い出されなかったこと」（『文科の継承と展開』都留文科大学国文学科編、勉誠出版、2011 年 3 月、285-306 頁、総頁数 607 頁）

６．研究組織

(1)研究代表者
古川　裕佳（FURUKAWA　YUKA）
都留文科大学文学部、准教授
研究者番号：80405076

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：